

「ルカノール伯爵」(6)

——パトロローニオの書——

ドン・ファン・マヌエル

木 原 太 源 訳

第四十六話「いかゞわしい女達が棲う所へ

偶然入り込んだある偉大な

賢者に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトロローニオとこのように話をされた。

「パトロローニオ、お前も知つての通り、人がこの世で大いに励まねばならぬことに、名声を博し、それを汚さぬよう守ることがある。予は、何事においてもお前に優る助言の出来る者などおらぬことを承知なれば、名声をより高め申し分なきものにかつ汚さぬよう守り得る手だてを聞かせてもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロローニオは返答した。「殿のお

言葉、私には身に余り、恐縮至極にございます。そこで、ある年老いた偉大な賢者に持ち上がりました事をお聴きいたゞきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロローニオは語り出した。「ある偉大な賢者がモロッコ王国のさる市に住まっておりました。この賢者は痔を患っておりまして、多量の便を排泄します際には大変な苦痛が生じ、その上に時間がとてもかゝりましたので、医師達からは「便意を催せば直ちに行かない、遅らせないように。排便を遅らせるとそれだけ便は硬くなり、従って苦痛は増大し、健康を害うことになりますから」と言われておりました。賢者はその指示通りに行ないましたところ、とても楽になったのでございます。

ある日、賢者が彼を師と仰ぐ大勢の弟子達がおります通りを歩んでおりましたところ、便意を催したのでございます。医師の指示に従うべく、勿論体にも良いわけですから、排便しようとする横丁へ入りました。ところが、偶々足を踏み入れました所は、心身を汚辱に塗れさせる商をしておりますいかゞわしい女達が住み処とする、狭い通りだったのでございます。賢者はそのような女達の棲う所だとは全く知りませんでした。ところで、患いが患いだったものですから、賢者はかなりの時間その通りに止まらざるを得ませんでした。その結果、悪名高いその横丁から出て来た時の賢者の様子から、世間は、彼が常の謹

厳な暮らし振りからは想像もつかぬことをするためにそこへ入った、と推ったのでございます。りっぱな人が非難され不評を買うようなことをしますと、それがどれほど取るに足らぬことでありまして、常日頃自堕落な暮らしや不品行な行為をしております者よりもはるかに取沙汰されますように、この年老いたまじめな賢者は、魂や肉体や名誉をこの上もなく傷つけるような所へ足を踏み入れたことで、世間の非難を浴び、不評を買ったのでございます。

賢者が帰宅しますと弟子達がやって来、沈痛な面持ちで口々に『残念だ、まずいことだ、師ご自身とわれらの面目は丸潰れだ。これまで誰よりもりっぱに守ってきた名声を失ってしまったんだから』と言いだしたのでございます。賢者は弟子達の言葉を聞くと驚愕しました。そこで、彼らがこう言った理由と、自分がいつ、どこで、どのような悪しきことをしたのかを訊ねました。すると、弟子達は『いかゞわしい女共が棲う通りへお入りになられた時におやりになったことについて、残念ながら、この市まちで口にしない者はございませぬ』と応えました。弟子達のこのような返答を耳にした賢者はとても不愉快でしたが『嘆かないでくれ』と頼みますと『一週間後に応えよう』と約束したのでございます。賢者は直ちに書齋に入ると有用なる一冊の小冊子を書き上げました。その中の好運と不運について記述する項では、弟子達に語りかける形式で次のように述べたのでございます。

『諸君、好運や不運というものはこのようにして生じる。それはしばしば、捜し求められたり、求めてはおらぬのに出会したりする。捜し求められる運とは、人が善事を行なえばその見上げた行為が人に好運をもたらし、悪事を行なえば不運をもたらすものを言うのである。これが捜し求められる好運と不運で、その何れかゞもたらされるような行為を人が行なうからである。

また、求めてはおらぬのに出会す運とは、歩いていて大金や高価な品物に遭遇する如く、努力もせぬのに転がり込む好運のことであり、他人が鳥目掛けて投げた石が頭に当たって負傷させられるように、何もしないのに危険な目に遭うことがあるが、これが求めてはおらぬのに出会す不運というもので、何もせぬのに不幸に見舞われたからである。

さて諸君、君達は捜し求められる好運或いは不運というものには二つのことが相互に関係しあっておることを知っておく必要がある。つまり、努めて善事や悪事を行なって好運や不運を招くことと、なされた行為の善悪に応じて神の報酬がもたらされることである。また、求めてはおらぬのに出会す好運或いは不運というものにも二つのことが関係しあっている。不幸や悪評がもたらされぬよう、悪事を働くことや疑惑を招くことに巻きこまれぬよう努めて身を守ることと、不幸や悪評を招く要因となるものから身を持った上で、過日わが身に降りかかったような不運がもたらされぬよう、神に切願し加護を求めることであ

る。何故ならばわが身の健康にとっては止むを得なかつたし、後めたくもなく、後指を指される必要もないことをするため、残念ながら、いかかわしい女達が棲う横丁へ入ったことで、何の落度もないのに名譽を傷つけられているからである」

ルカノール伯爵様、ご自身の名譽を高められ不朽にされたいとのご意向でございますならば、次の三つの事をおやりいたゞかねばなりません。一つは、神の意に適う善事をおやりになることでございます。それをやり遂げられました後は、ご自身の名譽とご身分を大切になさりつゝ、臣民の意に適う善事をなさることでございます。そして、殿のご名聲がどれほど轟いておりましても、善事を怠り悪事をなされますと、失墜するものであることを銘記なさって下さい。善事を実行し始めたもの続けなかつたことで、これまでの名譽を失い、悪評を買う者が大勢いるからでございます。二つは、殿のご名聲がいや増し、常時轟き渡りますよう善事のご励行のお導きと、その失墜を招く言動からのお加護を神に乞われることでございます。三つは、殿のご名聲が保たれますよう、人の疑惑を招くご行為は決してなさらぬことでございます。絶えず善事を行なつていても、疑惑を招く行動が、悪事を行なつたかの如く世間の誤解や曲解を招き、名聲に傷をつけることになるからでございます。殿は次のことをご銘記なさって下さい。世間が物事を現象面から事実であるかのようによく考え口にする行為は、人の名聲に有利或は不利に大きく作用するものであります。神や魂に大きく

作用するものは行為とその意図のみでございます」

伯爵はこれを有意義な所見であると判断されたので、魂が救済され、名聲や面目や地位が守れるような事を行なわせ給え、と神に乞われた。

ドン・ファンはこの教訓談をとて有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

言動に気をつけて常に善を行なえば、

汝の名聲は如何なる時も汚れぬであろう。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十七話「あるモーロ人ととても臆病

だと言うその姉とに起つた事

について」

ある時、ルカノール伯爵はパトロニーオとこのように話をされた。

「パトロニーオ、予にはひとりの兄があり、われらは両親を同じくする兄弟なので、予は兄を父のようにおもひ、恭順の意を表していることを承知しておいてくれ。兄は良きキリスト教徒、分別豊かな士との評判を博しておられるが、神は予を、富

と権勢において、兄より優るようにされた。兄は、口にはされぬが、予を嫉んでおられるのは明白だ。兄に援助を要請したり、何かをしてもらおうとする度毎に『罰が当たるだろうからしない』と言われたり、同じ理由で予の求めを拒まれたりさえなさる。一方、予の援助が必要になると『たとえ総てを失つても、兄のために身命と全財産を投げ打つべきである』と言明されるのだ。兄とはこのような関係にあるので、予に最も都合なる身の処し方を助言してもらいたい」

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「兄上様の殿に対してお振る舞いは、あるモーロ人がその姉に申したことに酷似しているようにおもえるのでございます」

伯爵はそれほどのような話ことなのかとお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「あるモーロ人は一人の姉がございましたが、これがまた神経が殊の外繊細な女性でありますことから、目にする物や人からされる全ゆる事に、おどおどびくびくしておりました。それは、常日頃モーロ人が用いております水差しの中の水が飲まれます際に注がれる音を聞くだけで、びっくり仰天し、気絶せんばかりの状態になるほどございました。ところで、彼女の弟は善良な若者ではございましたが、あまりの貧しさ故に、やりたくないことをしておったのでございます。そのために、非常に恥ずべき手だてで暮らしを立て、おりました。それはこのようでございます。死人が出ますと夜中に墓地へ出掛け、経かたびらや副葬品

を盗んでは、それを生活の糧にしておりました。このことは彼の姉も承知しておったのでございます。

ある日、一人の大金持ちが身まかるといふ事が起きました。遺骸は豪華な衣服に包まれ、高価な品々と一緒に埋葬されました。これを知った姉は弟に『副葬品の盗み出しを手伝いに今夜お前と出掛けたいわ』と告げたのでございます。夜になると姉弟は死者の墓穴へ行き、掘り返しました。そして遺骸を包んでいる高価な衣服を剥ぎ取ろうとしましたが、切り取るか死者の首の骨を折らない限り、衣服は奪えないことが分かったのでございます。そこで姉は、首の骨を折らずに衣服の方を切れば価値が無くなりますので、非情にも死者の頭を両手で掴むと首の骨を折り衣服を剥ぎ取りました。姉弟はさらに全ての副葬品を奪うとそれらを抱えて立ち去ったのでございます。

翌日、姉弟が食卓に着き、水差しの水を飲もうと注ぎましたところ、姉はその音に驚いて失神しそうになりました。その様子を目にした弟は、姉が平然として死者の首の骨を折ったことを憶い出し、彼女にアラビア語でこのように言ったのでございます。

Aha yā ukhtī, tafza 'min baqbaqū wa lā tafza min fataq 'ungu. これは次のような意味でございます。

「おや、姉さん、どくどくという水の音にはびっくりしても、死体の首の骨を折るのは怖くないんですね」

今日、これはモーロ人の間でよく使われる言葉になっている

のでございます。

ルカノール伯爵様、兄上様が、たとえ仰るほどではございませんでも、すでに殿からお聞き致しております「大罪になるだろう」とお述べになって殿のお求めをお避けになり、逆にご自分のことになりますと、たとえ殿に大罪や大変な危害を及ぼそうとも、ご要求をお申し付けになられますならば、それは水差しの水を注ぐ音には驚いても、死体の首の骨を折るのは怖くないというあのモーロ人の姉の態度と同じである、とお考え下さい。兄上様は殿に危害の及ぶことをご要求なさっておられますので、殿は兄上様がなさる通りのことをおやりになることでございます。つまり、兄上様には巧言を用い、愛想よくなさって下さい。兄上様にはありがたく、殿には支障を来さぬことをおやり下さい。しかしながら、大事となりますことには、常に最も然るべき方法を用いて回避されまして決して大事に致らぬようご用心なさって下さい」

伯爵はこの助言を非常に有意義であると判断されたので、その通りに振る舞われたところ結果は上々であった

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので、本書にそれを記させた。そして次のような詩を作った。

汝の求めに応えぬ者の為に、
持てる総てを失うな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十八話 「友を試した男に起った事に

ついて」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオとこのように話された。

「パトロニーオ、思うに、予には大勢の友がある。彼らには「貴殿のお役に立てるのなら、身命と身代を投げうつに吝かではない。それに、われらの仲を裂くものなどこの世に何一つござるまい」と申すのだ。そこで、予はお前の叡智を頼み、彼らが言葉通り予の友になる友であるのかどうか、知り得る手だてを言ってもらいたいのだ」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「この世において親友に優るものはいませんが、窮地に立たされた際の際の友は、人が思っておりますほど多くはない、とご承知置き下さい。ましてや、差し迫った状態にありません時、誰が真の友であるかを見分けることは難しいものでございます。そこで、真の友とは如何なる者であるかをわきまえますには、あるまじめな男と、多くの友達がいると言うその息子とに起きましたことをお聴きいただきますれば幸でございます」

伯爵はそれがどのような話であるのかお訊ねになられた。「あるルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ある

男には一人の息子がございました。息子には何かと助言致しておりますが、中でも『沢山の親友を得るよう努めなさい』と常に言っております。息子は父親の意を酌んで沢山の人と親交を結び、その絆を強くするために贈物を始めました。すると、彼らは口々に『君の為ならどんなことでもする。必要とあらば、生命や財産を君の為に投げうつつもりだ』と告げたのでございます。

ある日、息子は父親とありました時『わしが言ったことを実行したのか。友達は沢山できたのか』と訊かれましたので『はい、沢山できました。とりわけ十人は、私が窮地に立たされました時には間違いなく、死を恐れずに命を張ってくれます』と応えたのでございます。父親は息子の返答を聞くと『これは驚いた。短期間にそれほど沢山の親友ができたわ。わしはずいぶん長生きしてきたが、これまでに一人半の友しかできなかったからな』と切り返しました。すると息子は、自分の言葉は正当である、と言いつ張ったものですから、父親は息子の主張を受けてこう言ったのでございます。『親友をこのように試してみることだ。先ずお前は豚を殺して袋に入れ、それを担いで親友一人ひとりの家に行き、殺した男を運んでいる。露見すれば、私は元よりこの事を知った者は絶対死から逃がれられないのは明白だ。しかし、君は親友なのだから、この死体を隠してくれ。そして困った時は私を弁護しに来てもらいたい』と言うのだ』と告げたのでございます。

息子は早速取り掛かると、父親の言葉通りに友を試しに出掛けました。友人の家を次々に訪れては、持ち上がった大変なことを打ち明けました。すると、彼らは『他のことなら助けもするが、これは生命や財産を滅ぼすことになるのでお手伝いしかねる。後生だから、家に来たことその他言は無用に願いたい』と言ったのでございます。しかしながら中には、『進んでお手伝いしませんか、お祈りはしておきます』と言う者や『刑場へ運ばれる時は、最期を見届ける迄一緒にいますし、厳粛に弔ってあげますよ』と言う者もいたのでございます。

息子は全ての友人を試しましたが、誰一人としてかばってくれる者がいなかったものだから、父親の所へ戻って事の次第を告げました。息子の報告を聞くと父親は『これで、お前は経験を長く積んできた者の方が浅い者よりも知識の有ることが分かったのだ』と述べると、さらに『わしには友は一人半しかいないが、行って試してみよ』と息子に告げたのでございます。

息子は、先ず、友人としては半人前であると父親がみております人を試しに行きました。殺した豚を担いで夜中に訪れ、呼び出しますと、不幸な事件と友人達の仕打ちを語り、父親の友人としてこの苦境を救ってもらいたいと頼みました。事情を聞いた父親の半人前の友人は『君のために大変な危険をおかさねばならない義理はないが、お父さんにはあるので袋を隠してあげよう』と言って、人間の死体だと思ひ込んでおります死んだ

豚の入った袋を担いで野菜畑へ行くと、キャベツを引き抜きました。そこへ袋を埋めた後、再びキャベツを元通りにし、それから息子を無事に送り出したのでございます。

息子は家に戻ると父親に出来事の一部始終を報告しました。すると「明日、この友人と一緒に来た時、何でもよいから言い掛かりを付けて食って掛かり、その最中に彼の顔を思い切り殴るのだ」と父親は言い付けたのでございます。息子は父親の言葉通りに実行し、殴り付けたところ、父親の半人前の友人は息子を見てこのように言ったのでございます。

「本当に、君はひどいことをする奴だ。しかし、君からどんな仕打ちを受けても、キャベツ畑の一件をばらしたりはしないと云っておく」

息子は父親にこの話をしますと、父親は真の友であるとおもっております人を試しに行くよう息子に言い付けたのでございます。息子は早速出掛けますと、父親の友人の家に行つて事の顛末を話しました。すると「君を死や危難から守つてあげる」とその友人は告げたのでございます。

偶々、この頃、市で人が殺されるという事件が持ち上がりましたが、犯人はつきとめられてはおりませんでした。ところが、この息子が夜中に袋を担いで出歩いている姿を幾人も人が目撃しておりましたので、犯人は彼だと判断されました。殿にはこれ以上申し上げる必要はございません。息子は裁かれ、死刑を言い渡されました。この父親の友人は彼の救出に全

力を尽しましたが、万策の尽きたことが明らかになりました時「あの若者に罪を着せたくはございません。実は、彼が犯人でないことは承知しております。真犯人は私の一人息子なのでございます」と判事に打ち明け、自分の息子を取り調べさせたのでございます。すると息子は自白致しましたので、処刑されたのでございます。こうして彼の息子は自らの命に代えて父親の友人の息子の命を救つたのでございます。

さて、ルカノール伯爵様、友人が試されました手だてをお話し致しました。私はこの話は真の友を見分ける好例であると考えます。故に、友を信じて窮地に陥る前に、また、そのような状態に陥つた時に期待の持てることを知るために、私は友人を試す必要があると考えます。親友は数人、或はもっと、恐らくそれ以上いるかもしれませぬが、これは全て好運の際の友でございまして、唯々運が向いている間の友でしかございません。またこの話は次のように霊的に解釈も可能です。人は皆友人がいるとおもっております。しかし、死を迎えます時、その悲しみの中で友を試すことになります。友を訪れますと、彼らは「自分のことで手一ぱいなのです」と述べます。そこで、聖職者を訪れますと「あなたのために神にお祈りしましょう」と答えます。妻や子は「墓地までお伴して厳粛に弔つてあげますよ」と告げます。このようにして、友人であると考えておりました者の本心が確かめられるのでございます。ところで、死を回避する手だてを彼らから求められませぬ時は、友人である

と考えておりました者から見放された息子が父親の下へ戻りましたように、万人の父親であります神の下へ戻るようになるのでございます。神は『半人前の友である聖者を試してみよ』とお告げになります。そこで、御言葉通りに行ないます。すると、聖者の優しさは並みはずれており、なканずく聖母マリアのは格別で、両者共罪人のために絶えず神にお祈りになっておられるからでございます。聖母マリアは罪人の母親のことや、母親が子供を産み育てる際の苦勞を、また聖者は神のために耐え忍ばれた数々の困窮・苦痛・責め苦・受難を神にお話しになって、罪人の過を庇護されるのでございます。罪人からいかなる理不尽な仕打ちをお受けになられてもかばい通されるのでございます。それは友人の息子に殴打されてもその父親の半人前の友が、この息子をかばったのと同じでございます。罪人は、手だてを尽しても靈魂の死を免れ得ぬことを悟りますと、神の下に戻るのでございます。息子が死からのがれさせてくれる友を見出せなかった時、父親の下へ戻ったのと同じでございます。われらが主なる神は、父親及び真の友として、自らの創造物たる人間に抱かれる愛を思い出されますと、真誠なる友にふさわしい振る舞いをされたのでございます。つまり、無罪の神の子イエス・キリストを、人間の罪科を拭うために、死ぬべく送られたからでございます。イエス・キリストは、順なる子として、父の命に従われ、真正なる神にして誠実なる人でありますのに、自らの生命で罪人を購なわれるべく、死を甘受され

たのでございます。

さて、伯爵様、最も真誠なる友人とはどなたであるのか、どなたを友人として得るべく努めねばならぬかを熟考なさって下さい」

伯爵はこの説明にとても満足され、この上もなく有意義であると判断された。

ドン・ファンはこの教訓談を非常に有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

神の如き完璧なる友は見出し得ない、
自らの生命で人を購なおうとされた。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四十九話「委任統治を終えると裸にさ

れて島に放置された男に起
った事について」

またある時、ルカノール伯爵がパトロニーオと話をされた際このように語られた。

「パトロニーオ、数多の方が予にこう申されるのだ。『貴殿は歴史とした家柄のかつ勢力のあるお方なのだから、さらに富や権力や名誉を大きくすべく力を尽されよ。それは貴殿に最も

必要不可欠にして相応しいことであるから」と。そこで、予はお前がこれまで常に正鵠を射た助言を与えてくれおり、今後もそうであることは承知なので、この件でお前の考える予に最もふさわしい身の振る舞い方を聴かせてもらいたい」

「伯爵様」とパトローニオは返答した。「愚見をお求めではございますが、二つの理由から申し上げ難いのでございます。一つは、殿のご期待に添いかねますことを申し上げることになりましょうし、二つは、殿の為になされた助言に異を唱えますことは心苦しいからでございます。このような二つの事情から数多あまたの方々の助言に異を唱えることを差し控えたのでございます。しかしながら、誠実なる助言者は誰でも、ご主人の利害や意を斟酌せず、最良と考えます助言を申し上げるのが務でございますから、殿にとりまして有効かつ適切であると考えますことを、所見として必ず申し上げることに致します。ところで、殿に助言をなされた方々は、良いことも述べてはおられませんが、それは申し分のない有益な助言ではございません、と申し上げておきます。そこで、全く申し分のない有益な助言でありますには、ある国の君主に選ばれました男に起きました事をお聴きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話ことであるのかお訊ねになられた。「ルカノール伯爵様」とパトローニオは語り出した。「ある国では慣習により毎年君主を選んでおりました。一年の間は全ゆる事が君主の命令通りに行なわれますが、任期が終ります

と、君主は一切合切の所有物を剝奪され、裸の身一つで島に放置されることになっておりました。

ある時、これまでにない才智に溢れる慎重な男が君主に選ばれるところとなったのでございます。この男は、一年が経てば前任者達同様の扱いを受けねばならぬことを承知しておりましたので、君主として在任している間に、予測のつく島に極秘裡にゆったりとした快適な住居の建設を命じました。そして、余生を送るに必要な一切の物をそこに整えました。住居は巧みに人目につき難い所に建てられましたので、彼を君主に選んだ臣民の誰ひとりとして察知することは出来なかつたのでございます。彼はまた賢明で思慮深い友人を数名確保しました。それは島で何一つ不足するものが無いように、よしんばあらかじめ整えておくのを忘れた物が必要になっても、送ってもらえるからでございます。

任期が終りますと、臣民達は彼から統治権を剝奪し前任者達同様裸になると、彼が安楽に過せるよう前以って建ておきました住居のある島に放置しました。彼は家に行き、そこでとても幸福に暮らしたのでございます。

ルカノール伯爵様、思慮深くありたいと望まれますならば、次のようなことをご銘記なさって下さい。現世をいずれば後にしなければならず、その時は裸身のまゝで去らねばなりません。持参できますのは善行のみでございますから、この世を旅立たれます時には、裸で追い出されましても生涯を快適にお過

しになれますようなお住居がすでにあの世におありになりますよう善行をお積みなさることが肝要でございます。ところで、魂の生涯は年令によって数えられるものではなく、永続するものであることをご承知置き下さい。魂は霊なるものでございませから、朽ちることはなく、不滅なのでございます。神は、功德に應じて報酬をあの世でお与えなさるために、人がこの世でなす行為が善悪何れであるかを見守っておられることをご銘記なさって下さい。このような理由から、この世において善行をなさいますよう殿にご忠告申し上げます。それは、あの世へ旅立たねばならなくなりました時、永遠に生き続けることになりますあの世ですばらしい住居をお見つけになりますよう、また短くてはかないこの世の富や名譽のために、確実に永続することになるものを失われないようにでございます。善行は見栄や虚栄により行なわれるべきではございません。殿の善行が人に知られるところとなりまして、その目的が見栄や虚栄によるものでなければ、その価値は失われることはございません。また、殿が存命中におやりになれないようなことを、殿の魂のためにおやり下さるような友をこの世にお残しになることでございます。このようなことを行なわれます傍ら、富と権力を大きくされるべく努力なさいますことは殿の務であり、よいことであると考えます」

伯爵はこの話と助言を非常に有意義であると判断され、神にパトローニオの述べた通りに実行出来るよう助けを乞われた。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような二行詩を作った。

はかなきこの世のために、
永遠の世を失うな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……